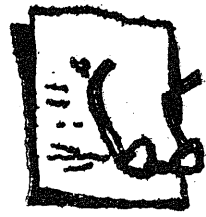


先生の読書期

— 夏休み雑言 —

倉 橋 惣 三



一ヶ月なり、二ヶ月なり、夏休みというものゝあるのは、子供や学生の以外には、先生だけのことである。役人でも会社員でも、一年を通じて、一定の休みがとれるだけで、それも、特別の事情がない限り、幾日と連続して休みのとれることとはない。家庭工業や商店の人々は、一年中休暇というものはない。それが、教師となると公然と、というよりも、権利のように、休みがとれるのである。それは、幼児、児童、生徒、学生に一定の休業日があるから、そのお附合いだとか賜（？）だとかいう人がある。その証拠、幼児の出席（？）に夏休みのない保育所では、夏だからといって先生の出勤に休みは与えられない。この、先生の夏休みというものを、誰れもケンカランという人はないし、怠惰だという人もないが、いゝねえと羨む人はあるかもしれない。保育所の先生にしても、幼稚園勤めの友達を羨むなんてことはない上に、この暑

いのお気の毒ですなえなんていわれると、却つてメンクラワれるであらう。同時に、幼稚園の先生方もこの休みを特別有り難いと、どこへ感謝する訳でもない。更に「わたし毎日幼稚園へゆきたいのだけれど、子供達が来ていないから、仕方なく休むのよ」と不平をいゝ給う熱心家もあるかも知れない位、御自分でお休みになる訳ではない。そうして、その間、ガラランとした園舎と庭が、小使のおちいさんとおばあさんと留守せられ、とき／＼若い先生が、ユカクがけて出園——出勤ではない——せられて、窓もあけずにお帰りになるだけである。（コレは失言罪）。

ところで、それはそれとして、その間、先生も決して、連続性退屈なんかしていられる次第ではない。平生幼児のためにお忙しくて、あれもこれも、この長休みにと貯えて置かれた御用の数々、御用のくさ／＼も多い。そのうえ、大切なレ

クリエーションとして、山なり海なりに、一年中の英気を養い貯えられることも必要だろう。殊に「少しは早く帰られないものかねえ」と、いつも言つて下さる御老親への孝行、御主人へのサーピスに、いゝ娘、いゝ妻としての家内公務も多しことだろう。一ヶ月や二ヶ月、ちぎたつて仕舞うのである。なかには、おキラクなお身分に任せて、朝、昼、夜と、一年中の睡眠量の貯蔵につとめていられる人もあろう。科学的に言つて、睡眠は貯蔵できるものかどうか知らないが、その人としては、始業後の精動を予め夢みる職務の為の忠実家たるに相違ない。

貯蔵といえば、喰いためということも考えられる。殊に、親が「りの若い先生達は、お弁当だつて、子供といつしよでしょう。ロクロク身にならないのよ」という毎日の勤勞報告に同情して、うち中で、「さあきようからお休みだ、ゆつくりいくらでもおあがりよ」と御馳走して下さる好意に對して、満腔満腹タペタイと（英語ではアペタイトという）を以てこれに報いられる。しかし、現代衛生科学によれば、栄養の喰いだめは、眠りだめよりも、ダメなことが、遺憾ながら明かである。少くとも、眠りだめ、喰いだめ共に、三十余日は足りないことのようにである。

ところで、こゝに一つ明かに貯蔵のきくものがあり、折角の長休みを、是非その方に活用したいことがある。それは読書による精神的生命糧の貯蔵である。殊に、ゆつくり嚙み

しめ、飲みこみ、反芻もしたい（牛の真似じゃありません）と常に思つてゐる大きい古典、深い訓え、堅い知識の本を、しつかりと味わひ読むことである。これには長い時間もいり、殊に、氣分の熟読判読、反読の落ちついた時間がある。

日々に幼児のために捧げている時間では無理であるうし、ふだんには、ふだんの仕事に入要な業務用読書もある。それは別にこういふ精神の貯蔵になる読書には、どうしても自分の時間があるのである。世間一般の人には長い長休みが先生にあるのは、このためだと気がついたとき、先生の夏休み論に、誰も異議のない解決がつく。生徒の生理的健康には日々一錠二錠のビタミン剤の定服用も、極めて有効だが、人間性の基本的健康のためには、ABCの単一補給以外に、もつと真にいのちのもとななるみつちりした読書の必要がある。

そんなら、どういふ読書がいゝ読書かということになりますが、一言にいつて、わが心のための書であつて、そういう良書は世にいくらでもある。多過ぎるに苦しむ位だ。いざ孤島に旅立つに當つて、特に一種を選ぶとすると、選び迷うてゐるうちに、夏の休みが、選びくたばれてゐるうちに終つて仕舞うかも知れない。そこで、一応この夏休みの活用として、いく条かの常識を言つてみる。

(一)、ふだんは読めない大部のもの

(二)、専門的よりも心を養う根本的なもの

(三)、新刊よりは古く広く読まれてゐるもの

内容の種類としては、その人の読みたいもの、という他はあ

るまい。たゞ銷夏娛樂のよみものとは別の本気の読書だから、単にうすつべらなたのしみ、ひまつぶしに流れてはならない。

(イ)の大部のものというのは、必ず頁数の多い本が良書という訳はないが、大部のものは、ふだん忙しい合間には手がつけにくいからである。それも、大蔵経とかいうことになること読み初めるにも格別の覚悟がいるが、旅行用の袖珍小本類は何も計画するまでもない。その他に、小説にしても、たとえばトルストイ全集とか、チボ一家の人々とか、一月がよりでないと耽読できないものが幾つもある。兎に角、雑種よりは、それだけで、ことしの夏の収穫と記念になるものがよかる。

(ロ)の専門的よりも根本的なものというのは、これも、専門的の保育法とか幼児心理学とかいうのは、当然ぶだんも読むものだから、夏休みには、敢てもつと大きく目をつけて、自分として、人間として、心の永久の養いとなるようなものに取つ組んだらどうだろうという意味である。そういうものを、謂わば「万人の書」「千古の書」といつたものを、多くの人が、案外少しも読んで居ない。東洋でいえば四書とか、西洋でいえばバイブルとか、儒教がどうの基督教がどうのということとは別に、人類の心を養つて来た貴重なものである。

(ハ)の意味は、必ずしも新刊を避ける訳ではない。教育者は、常に新感覚の持ち主でなければならぬ点から、新人の新著も素より大切なのであるが、新刊ものには、古く広く定評の

あるものに比して、読後の結果が、感性に多彩と香味とを添えてくれても、心の根本を深くは養つてくれないこと未熟のくだもののようなが屢々ある。

「この頃の保育界の先生方は、音楽を好み、映画に通じ、多くがモダンな文化人だが、案外読書人は少ないね」と、筆者の耳にさゝやいた読書人が居た。私はそれには答えなかつたが、来らんとする長い夏休みのために、この一文を書いた。